



お絵かきを楽しむC児たち



指で潰して色を付けるB児



硬い実(サルナシ)で潰すA児



A児の潰し方をじっと見る友達



見つけた桑の実

CASE 29 2歳児

「じやも園、楽しそよー!」

協力園
如水こども園

(幼児の実態)

A児は、2歳の終わりまで海外で過ごし、5月から日本での生活が始まりました。本園には、1ヶ月経った6月からの入園です。外国語の会話で育ってきたA児は、園生活で保育者や友達の話している言葉が分かりません。また、今までは違う環境に慣れないせいか、部屋に入ることを嫌がり、食事でも進まない状況です。保育者との信頼関係を築くことはもちろん、子ども同士のつながりも含めて、A児への関わり方をクラスでの職員で考えていくことにしました。担当のa先生は、登園してからの時間の多くを外で過ごすA児の興味や、楽しめる場所を探りたいと、毎日、A児と一緒に園庭を散策することにしました。

こども園の入り口に続くアプローチには、桑の木やサルナシ等、様々な種類の植木があり、日差しの強い日は遊びの途中でも、木陰のベンチで涼むことができます。また、園庭は、体を十分に動かして遊べるような場となっており、子どもたちが駆け上がったたり、降りたりできる大小の築山もあります。こども園の隣には児童クラブの園庭があり、小学生が学校に行っている間は、園児がいつでも利用できる場となっています。今までのA児の遊んでいる様子から、どちらかというと、児童クラブの園庭を気に入っているように感じられました。

児童クラブの園庭に遊びに行くと、年長児が桑の実を木から取って食べたり、落ちている実の汁を手につけたりして遊んでいました。年長児の手は、桑の実の汁の色で濃い紫色になっています。A児は、年長児の遊ぶ様子を見ていました。a先生は、落ちていた桑の実を見つけ、A児に見せました。A児は、a先生の手についていた桑の実の色に気付くと、自分の指を使って、a先生の手の中の実を潰しました。A児は、2人の手が、桑の実の濃い紫色になると、a先生を見てニコッとしました。この後も2人で桑の実を探し、指で潰して遊びました。部屋に入る時、桑の実色になった手を見て、A児とa先生は笑い合いました。

お迎えの時に、A児が桑の実を潰して楽しく遊んだことを母親に伝えると、母親では、近所の子どもたちが土や木の実を潰して遊んでおり、A児もまた、木の実を潰して遊んでいたと話してくれました。そして、A児が母国で遊んでいたという木の実の潰し方を母親から教わり、遊びの中に取り入れることにしました。次の日、担任のb先生は、母親から教わった遊びができるよう、すり潰す木片を準備しておきました。A児が登園すると一緒に桑の実を集め、朝の集まりでA児のしていた遊びを友達に紹介しました。児童クラブの園庭に着くと、A児はお気に入りの場所、b先生が準備した木片の上で、指を上手に使って黙々とすり潰します。友達が一、二人と寄って来て、潰し方をじっと見ています。ふるさとでの遊び方を思い出したのでしょうか、A児はポケットから取り出したサルナシの硬い実で、桑の実潰しを始めました。見ていた子どもたちも、A児の真似をして潰してみると、A児と同じように色が出ました。A児は、近くにいたb先生と友達の顔を交互に見て、嬉しそうな表情をしています。

その次の日も、桑の実潰しに興味をもった子どもたちが、A児の遊んでいる所にやってきました。手で潰す子どももや、硬い実の代わりに小石で潰してみる子どもも、枝で潰す子どもなど、色の出し方は様々です。そこにb先生が白い紙を持って来ると、B児は、紙の上に桑の実を置いて、指で実を潰して、そのまま指を動かします。右手、左手、指の動きに合わせて色が付いていきます。指の動きで線ができていく楽しさを感じているようです。C児たちは、白い紙の上に描かれる桑の実の色を見ています。以前、花びらをビニール袋に入れて、綺麗な色を出していた遊びを思い出したのか、やりたそうにしています。手に色が付くことが苦手のようです。b先生が実を潰して色を作ったあげました。C児たちは、手が汚れないように枝を使って、お絵描きを始めました。遊び方は様々ですが、A児と先生たちの見つけた桑の実潰しの遊びが数日続きました。

この遊びをきっかけに、A児はだんだんと自分の部屋に入ることのできるようになってきました。部屋を移動する時などは、a先生に自分から付いて行くことが多くなりました。保育者との信頼関係を築きながら、園の生活にも慣れてきたように感じられます。

A児は、園生活を楽しむ中で、身近な保育者と関わる心地よさを感じ、友達と関わりたい気持ちが高まっているようです。友達のよさを感じながら、親しみをもちて生活していくことを期待します。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

- 豊かな感性と表現
- 健康な心と体
- 自立心
- 社会生活との関わり

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

事例から見られる10の育ち

A児は、ふるさとでの遊びを思い出して、保育者と楽しんだことで自分の居場所を見つけたらと思われる。さらに、A児は友達が自分の遊びを見ていることに気付く、友達に自分の遊び方を教えた方がいい芽生え、やって見せるという方法で表現した。また、友達が真似してくれただけで、一緒に遊べる楽しさを感じたのではないだろうか。A児は、保育者との信頼関係を基盤に自己を発揮し、身近な環境に主体的に関わる経験をしていると捉えられる。

これからの園生活の中で、発達に応じた経験を重ねながら、自分の力で行うために考えたり、工夫したりして、諦めずにやり遂げようとする、5歳児後半の姿につながると考えられる。

事例から見られる10の育ち

社会生活との関わり
保育者は、年長児の様子をじっと見ているA児の気持ちを汲み取り、思いが実現するように保護者や保育者同士の連携を図った。これにより、A児は自分の知っていた遊びを友達と一緒に楽しむ、保育者や友達と安心して関わっていた。A児は、『家庭』から『こども園』という少し大きな社会へと、生活の場を広げていったと考えられる。

自分が見守られている安心感を基に、身近な人と触れ合う体験は、人との関わり方に気づいたり、相手の気持ちを考えたりしていく経験となっていく。このような経験を重ねながら、5歳児後半頃には、親しみをもちて友達と関わり、園生活を楽しむ姿になっていくと思われる。

自立心

保育者の援助・環境構成のポイント

- 子どもの気持ちを尊重し、温かく見守り、愛情豊かに、応答的に関わる援助
言葉が十分でないことを理解し、子どもの何気ない仕草や表情から、お気に入りの場所や、子どもの興味(桑の実を潰して色を出したいこと)を感じる。
- 自分でしようとする気持ちももてるような環境
保護者や園の職員と連携を図り、子どもの興味を探ったり、これまでの体験を基に環境の構成をしたりする。